

# 山と博物館

第53巻 第2号 2008年2月25日

市立大町山岳博物館



ニホンカモシカ(2008年1月18日)

撮影 戸谷 諭美

## ニホンカモシカに 魅せられた学生

宮野 典夫

専門学校の学生からカモシカについて観察し、学びたいと相談を受けた。彼らはカモシカの知識が乏しかったが、初めて見たその姿に感激し、何かをやってみようと感じたようである。

博物館で学び、学習会を開いて、生態や特性がわかっていると、「どのくらいの生活圏をもっているのだろうか?」「休息場はどこな所だろうか?」など疑問が生じてくるようになった。中には「利き足つてあるかな?」「反芻のとき顎は右回りか、左回りか?」など、素朴な疑問だが、文献でもよくわかっていないことも浮かんできた。

学校の所在地が東京都でフィールドが大町市という距離的ハンデと2年間という限られた時間の中で、観察を続けることは容易なことではない。凍りつくような厳冬期にカモシカの動きをじつと観察するつらさを味わった学生や、慣れない場面での記録不備、シャッターチャンスがあったにもかかわらず手ブレをおこして悔しい思いをした学生もいた。

カモシカの観察と同時に環境教育を進めてきた彼らは、先輩から後輩へと知識や観察データを引き継ぎ5年間が経た。当初はカモシカの姿を発見するのに2、3日も費やすことがあり、遭遇できるのは偶然性が大きいのかと思わざるを得ない状態であったが、今では休息場の位置や足跡などからカモシカの所在を推測できるようになった。

# 「高校山岳部の活性化」を考える

大西 浩

はじめに

私は、およそ四半世紀前に高校の教員になった。そのころまで、山国信州の高校には多くの学校に山岳部が存在し、山には若者たちの声がこだましていた。当時は、もつと山が身近なところにあった。しかし、登山をめぐる社会の状況も大きく変化した。この間、世の風潮に合わせるように、高校生気質も大きく変わり、いわゆる3K(きつい、危険、汚い)の代表の如き「山岳部」の門をたたく生徒は減少、今や絶滅危惧種であるかのような感さえる。こういった状況の中、学校現場のありようや指導者の側の意識も随分変化してきた。

私に関わってきた中信地区の山岳部という限定つきではあるが、この間の高校山岳部の流れを振り返りながら、これからの「高校山岳部」の活性化に向けて、若干の考察をしてみた。

## 上高地のベースキャンプと学校登山

およそ三〇年前、私自身の高校生活は山岳部に所属してのそれではなかったが、夏の思い出は、「山」と切っても切れないものがある。大鍋をくくりつけた特大のキスリングを背負い、ニッカボッカに登山シャツ、重登山靴に身を固めた山岳部の友人たちが山をめざす姿は、私にとって、凛々しくま



「御嶽スノーシュー」(2007.01)  
木曾高校、御嶽山麓でスノーシューを満喫

かの学校で続いているだけである。今も残る大町高校の「全校登山」に代表されるそれは、まさに山国信州ならではの行事であったのだ

が、未だに途切れることなく連綿と続いている大きな理由として、山岳部OB会の存在が挙げられよう。全校生徒がいくつものコースに分れて北アルプスの山々に登るのだが、どのコースにも引率の教師のほかに、山岳部のOBがサポートに就く。北アルプスのお膝元ならではの伝統だ。

こうして考えてみると、この「上高地BC」といい、「全校登山」といい、「山岳部」の学校の中におけるステータスの大きかったことが見て取れる。

学校登山の衰退と軌を一にするように、上高地の「BC」も、一九九〇年代以降は急速に利用者が減り、その使命を終えた感もあつたが、規模を縮小する中で、なんとか存続してきたのが深志高校と県ヶ丘高校のそれであった。しかし、最後まで残ったこの二校の「BC」も二〇〇三年を最後に撤退を余儀なくされたのは、一つの時代の終わりを告げることができただけであった。

## 大学入試制度改革と技術水準の低下

高校山岳部のメインの活動は、夏休みに行う「縦走」と「合宿」というのがかつての通例であった。一九八〇年代前半までは、多くの学校の山岳部が四泊五日程度の縦走と三泊四日程度の合宿を計画実施し、夏休みに一〇日前後は、山に入っていた。そして、三年生はこの夏の大事な事を終えてから、卒業後の就職や進学に向けての準備にとりかかったものである。

ところが、一九七九年から大学入試制度が大きく変わり、国立大学の一期校、二期校が廃止され、一月に共通一次テストが導入されることになった。それまで国立大学の入試は



「県大会」(2007.06)  
2007年度 長野県高等学校総合体育大会、スタート直後の様子

三月であったものが、二ヵ月前倒しになり、高校現場では、文化祭や行事の位置の見直しが行われるとともに、夏休みの過ごし方も大きく変わらざるを得なくなったのである。この影響は、部活動はもちろん学校登山にも及び、徐々に日数の縮減や縦走・合宿の整理・一本化などへと進んでいく。

後述する「中信安全登山研究会」の調査によれば、現在でも夏休みに縦走と合宿の両方の活動を行っている山岳部は存在しない。中には三年生は六月に行われる県高校総合体育大会登山大会(以下県大会と記す)で引退し、三年次の「夏山」には参加しないという学校も出てきているようである。

一九八三年六月、「県大会」終了後に豊科高校の生徒が前常念岳で滑落死亡するという残念な事故が発生してしまつた。高体連登山専門部では、これ以後、二度とこのような不幸な事故を起こさないために、県大会会場については雪上での開催を自粛してきた。

県内の高校生が一堂に会しての県大会は、高校登山のスタンダードを試される場とも言

うことができる。事故を起こさないというのは、当然のことではあるが、年に一度のこの大会が雪上で開催されなくなったことで、大会で要求される技術レベルを下げる結果になったのは否めない。

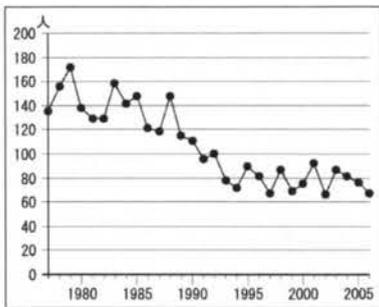
県山岳総合センターでは開所以来、五月の針ノ木雪渓で「高校登山研修会」を開催してきたが、往時は全県からの参加者が殺到し、参加制限をするほどの盛況ぶりであったが、今は継続が危ぶまれるほどの人数しか集まらない。この研修内容である雪上技術、ロープワークなどは、かつての高校山岳部の生徒ならば一通り身につけたであろう登山の基本技術だが、これらを身につける絶好の機会が活かされていないのは、県大会で要求されるスタンダードレベルが下がったことと無関係ではないと思われる。

また、一九九〇年代初頭までは、一二月の下旬の五龍遠見尾根や八方尾根には複数の高校の山岳部が二〜三泊程度で入山して冬山訓練をしていたが、これも今ではほとんど行われていない。

### 山岳部員数の推移

#### 激減期を経て安定期へ

私は、一九八二年に高校教諭となったが、南信東信の高校の勤務を経て、一九九二年に美須ヶ丘高校の「ワンダーフォーゲル部」の顧問となった。「山岳部」という名前では生徒が集まらないう前回の顧問が苦慮の末、「山岳部」からややソフトなイメージの「ワンダーフォーゲル部」へと名称変更した直後のことであった。



資料1 過去30年間の中信地区の山岳部の部員数の推移(中信安全登山研究会の調査による)

しかし、ここ一五年間は、一〇〇名には届かないものの、六〇から九〇名程度のところで推移している。実際はこのあたりの数字が底値で、少ないながらも安定していると思われる。毎年平均一定数の山岳部の生徒は確保できていると前向きに評価したい。

また、山岳部の数は一九八三年から一九八五年の四校が最多であるが、この三〇年間平均すれば一〇校程度の学校で常時山岳部の活動は命脈を保ってきている。(資料2) 学校に「部」が存続し、やる気のある顧問と生徒がいさえすれば、山岳部の再生は可能である。

多くの顧問が、そういった地道な活動をしている結果が生徒を引き止めていると思うが、その一例として、私の勤務している木曾高校定時制の例を挙げてみたい。本校は、全校生徒二七名という小規模な学校であるが、現在はそのうちの四名の生徒が「アウトドア部」に所属している。様々な生徒たちを前にした私が本校で取り組んできたことは、「地域に残る自然に、生徒と一緒に触れることを考え、できるだけ多くの切り口を用意して提示すること」である。そしてその楽しさを機会あるたびに語ってきた。顧問が、ほんのわずかの「スク」を出すことで、生徒は本来持っている「自然が好き」という極めて自然な感情を呼び覚ますことができる。あとは自然自身のもつ教育力にまっ。

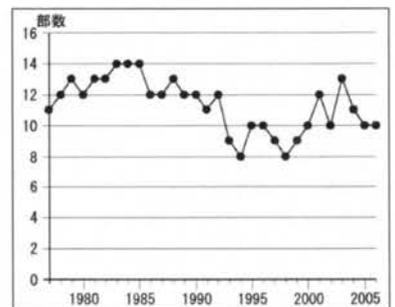
山岳部の活動華やかかなりし三〇年前との比較で、数においては明らかに減少しており、一九九二年に一〇〇人を割り込んでからはその水準に届くことはない。かつては二〇人以上の部員を擁している学校も多かったが、近年は一桁(それも前半)という学校が多くなっている。

冒頭述べたように、世の軽佻浮薄の風潮の中で、「危険を冒し、汚く、きつい」思いをして山へ行くことに価値観を見出すことは、今の子どもたちには難しいことかもしれない。そんな中で、私は、山岳部生徒は激減したという印象を持っていたが、現実にはここ一五年ほどはそれほど大きく減少してはいないというのが実態である。加えて、私の中には生徒と日常的に触れる中で、「いわゆるアウトドアの活動に興味をもっている生徒が、潜在的にはかなりいるのではないか」という予感もある。

具体的活動としては、沢登り(田立の滝や柿其溪谷)、登山、山スキー(御岳や乗鞍)、山菜取りやきのこ狩り、時には川下り、スノーシュー体験など生徒と話し合いながら多彩な活動を提案する。ハードな活動が難しい生徒には、アウトドアでの焼肉や地域再発見の街歩き企画なども積極的に取り入れる。今、生徒たちにとって一番トレンドイなのは、安全性を確保した自然の岩場でのクライミング

その後一九九九年に、木曾高校に異動して現在に至るまで「山岳」関連の部活動に関わり、高等学校山岳連盟登山専門部(以下「高体連」と記す)の委員をも務めてきたが、一貫している課題は、「部員をいかに確保するか」ということであった。後述する「中信安全登山研究会」の調査(資料1)によれば、一九七七年から二〇〇七年までの間で、この地区の山岳部の生徒が一番多かったのは一九七九年の三校一七二人であった。今年二〇〇七年には、中信地区には九校一〇課程の高校に、山岳関連の部活動が存在しており、所属生徒数は七七人である。

自然が好きなお子ともたちとともに



資料2 過去30年間の中信地区の山岳部関係の部の推移(中信安全登山研究会の調査による)

残る自然に、生徒と一緒に触れることを考え、できるだけ多くの切り口を用意して提示することである。そしてその楽しさを機会あるたびに語ってきた。顧問が、ほんのわずかの「スク」を出すことで、生徒は本来持っている「自然が好き」という極めて自然な感情を呼び覚ますことができる。あとは自然自身のもつ教育力にまっ。



「合同ピバーク」(2006.12)  
大町高校・木曾高校合同「焚き火&ピバーク合宿」

努力を積極的にしたものである。こうするところが当の生徒たちにとっても、また「自然に興味をもっている」アウトドア予備軍の生徒にとっても山岳部活動への大きな動機付けになった。そもそも一カ月から二カ月に一回、山に行くだけでは、山岳部とは言えない。

**顧問の熱意と相互の繋がりを**

こういった日常活動を充実させるために不可欠な要素が、顧問の熱意と学校を超えた横の繋がりにある。考えてみれば、ここ一五年間、中信地区の高校において山岳部が命脈を保つてくることができたのは、それぞれの学校において、顧問の先生方のこういった工夫や熱意があったからこそである。この地区には、クライミングの指導に長けている顧問、インターハイ常連監督、社会人山岳部に所属しているいわゆる「山や」、そして何より生徒のことを第一義に考える先生・・・素晴らしい顧問たちが夢と情熱をもって、山岳部を盛り立てようと試みてきた。

幸い中信地区には、顧問の連繋をとれる場として「中信安全登山研究会」と「高体連登山専門部」がある。前者は、一九五四年二月二十九日に起きた県ヶ丘高校山岳部の岳沢での雪崩事故を契機に、「二度とこのような悲惨な事故を起こしてはならない」と、当時深志高校校長であった平林圭介氏が、山岳遭難防止を主とする委員会の設立を提唱（創設当時は「安全教育研究会」と呼称）し、その実現を見た。創設以来、半世紀以上にわたって毎年夏と冬の二回、各高校の顧問が、登山計画を持ち寄って検討会を開催してきたものである。一方、一九六四年には、県内の他地区に先駆けて「中信高体連」の中に「登山専門

である。これらの活動を行うためにはもちろん事前の下見やリサーチしておくことは言うまでもない。

どんな活動であっても、参加した生徒は確実に自己を解放し、活動を通して一段階段を昇る。そして、生徒が生徒を通じてその素晴らしさを語り始めたものだ。生徒が生徒を呼び、活動は活性化する。

かつて、全日制に勤務していたときに私心がけていたことは、これは前述の点にも関わるのだが、学校の中で活動をアピールすることだった。放課後、帰宅部の生徒の通り道で、美味そうなニオイを漂わせて、料理をつくって食べてみるとか、校舎の屋上から懸垂で降りたり、ユマーリングで登ったり、それが邪道だというならば、時にはひたすら荷物をつかすので一階から屋上までのポツカ訓練や学校の裏山までのランニング、天気図をとる練習などの正統派のトレーニングなど。「おもしろそうなことをやっている連中がいる」ということを、全校の生徒に知らせる

部」が設置された。（全県組織の長野県高体連登山専門部の創設は一九七〇年）その後は、この両者がタイアップしながら高校山岳部や学校登山で行なわれる登山の安全に寄与してきた。

「中信安全登山研究会」では、「山岳部の活性化に繋げたい」との思いで、かつては行われていたが、長く中断していた顧問の自主的な研修会を二〇〇三年より復活させた。学校現場では、かつては「山岳部のような大変な部活動は、若い教師に顧問をさせておこう」という風潮もあったが、昨今は新規採用も減り、学校現場に若手がいないことも問題の一つとなっている。また「生き死に」にも関わり、専門的な技術や知識の必要な山岳部の顧問になり手がいないのも率直な事実である。かつ顧問が一人自分の学校だけで技術を研鑽する機会も場面もない。そうすると、部活動そのものも衰退するという悪循環を招く。

そこで、顧問が集まって登山技術を磨くことで、集団的に技術を上げようというわけだ。研修会では、技術の向上のほかに、顧問相互の人間関係を深めることも目的の一つに置いている。近年「フリークライミング」という新しい世界に魅力をもつて取り組む生徒が増えている。場所の問題とも相俟ってこの世界こそ集団指導体制が求められているが、少しずつ学校の枠を越えて指導できる体制が整いつつある。これは一例だが、これに限らずここでの繋がりが、学校を越えた合同合宿や合同訓練となつて、実を結び始めている。

**おわりに**

往時に比べれば確かに生徒は減少し、登山技術は低下したかもしれない。しかし、高校時代という多感な時期に、様々なアウトドア活動を体験させ、その魅力の一端に触れさせることができれば、生徒は、その先きと自分で何かを選び取っていくに違いない。そういった素地を育てることが我々の使命であるとの確信をもって、広く「自然教育」という立場で、生徒と顧問がともに楽しめるような部活動に育てていければ、高校山岳部の将来は、まだまだ捨てたものではない。そのため、繰り返しになるが、我々顧問教師が、ちよつと「ズク」を出すことが求められている。そして、こういった「自然教育」の観点は、単に山岳部という枠を越えて、閉塞状況にある現在の教育に対する大きな解決策でもあると私は信じている。

（木曾高校教諭・長野県山岳協会副会長）



「研修会」(2007.11)  
中信地区安全登山研修会の顧問研修会で、セルフレスキュー訓練「ザイル担架」をつくる